

市民とまちづくり

魅力ある地域をめざして

田村明（法学部教授）

開かれた大学の一環として、毎年地方都市で開催している「法政大学公開講演会」。今年も金沢市、岡山市、そして宮崎市で行われた。この講演会の講演内容を広く在学生にもと考へ、本号より各講師の講演録を掲載することにした。

まちづくりの意味と課題

魅力的なまちづくりというのは、結論的にいうと、自発的に自分たちで、「まち」をつくっている町です。世の中の流れだからやっているのではない、自分たちがそれがどうしても必要と思うからやっている。やった結果が今の流れであってもそれはかまいません。いろいろな法律や補助金を大いに使ったらいいのですけれども、他人がいうから、制度があるからやっているのではなく、本当に自分たちの町を考えたらこういうことがいいことだ、それだったらやろうじゃないか、みんなで一緒にやろうじゃないかで始まります。それを実施するために制度は少しずつでもあるならば使えばいいし、不十分なら少しずつでも変えようじゃないかという気持をもつ町です。

そういう自発的、自立的にやっていくまちづくりが今日の課題だと思います。「まちづくり」という言葉の話を少ししてみたいのです。

私が最初にやったころは、地域をよくするには地域開発とカ都市計画とカ都市開発とカ都市整備とかという言葉が使われました。もちろん言葉としては立派なのですが、皆さん方がお聞きになって、あれはお役人の言葉だなという感じでしょう。地域開発、都市開発、都市計画、都市整備、都市建設、みんな漢字で書きますと市民にとって自分たちの問題ではない感じがする。本当は地域やまちをよくするのは、自分たちの問題なのです。その地域に住む人たちのためにその地域をどうするかという考え方は、市民自身の問題のはずなのです。

ところが、これまでの言葉を聞くと、あれは役人がやっている、あるいはせいぜい専門家がやっているという感じです。実はもっと極端に言いますと、三十年前ですが「地域開発」について、国の役人が書いた文章がありますが、こう書いています。「地域開発というのは特定の地域のためではない」と書いているのです。「地域開発とはその地域のためにやるのではない。それは地域の人たちのやることで、おれたちはそんなことは知らない。国が取り上げる地域開発というのは、国家目的でやっているのだ。国家目的になるからこそ地域開発と言うのだ」。今はこんなことを書いている人はおりませんが、地域が地域のためにするのは地域開発ではないと書いてあるのです。

そのころは地域開発ブームでした。私どもはずいぶんいろいろなところの地域開発のお手伝いもいたしましたが、私はそうは思いません、私は、地域開発は地域のためにやる、そしていい地域を地域住民のためにつくるんだ。方々でいい地域ができる結果、もちろん国もよくなります。だめな地域ばかりある国がよくなるはずがありません。それなのに地域のためなどではない、国

家目的のためにやるものこそがいいんだということが、まかりとおっていた。当時の工業開発などはまさにそういう発想なのです。だから、日本国中を工業地帯にしてしまおう。それはなにも地域のために考えているのではないと平気で言っています。もちろん政治家はそんなことをいうと選挙にひっかかるからそうは言わないかもしれませんが、これは優秀な官僚の作文です。その当時の工業開発、新産業都市などというのは、背景はそういう発想なのです。

私はもともと地域のためから地域の人たちが考えていってよくなる、それが今の国の大きな流れのなかに戻って行って町ができる、地域ができる、日本国土ができるという一種の積み上げ方式を考えていくべきだと思います。

同じ戦後の復興した国でも全く違うのはドイツです。ドイツはそういう考え方です。連邦制という制度も違います。それぞれ地域が自立している、自立しているところがたくさんある。パーツと日本みたいに奇跡の復興をしましたがけれども、最近ドイツは大したことはないかとか言われますが、そんなことはないと思います。

ドイツ人の一人当たりの GNP を追い越したとか言っていますが、今は日本もレジャーブームとカリゾートとか言っていますが、年間で働く時間がドイツは日本よりもなんと五百時間少ないのです。それでちゃんとそれだけの豊かさをもっていて、EC のなかの中心になっているわけです。そんなにガツガツ自分が全部やらない、もちろん家も立派な家、町へ行くと必ず緑豊かなシュタットバルドという森があります。そういうところに悠々と暮らしている。GNP だけで、計算上で計算してみてもしょうがないんです。

国際化の中での環境問題

環境の問題でも私はずいぶん企業と話をしました。二十年近く前は、そんなことを言っても、われわれは輸出しなければいけないんだ、国際競争に勝つためには余計な環境的なコストなどではできるだけかけたくない。国内は最低限のことで済まして努力して、日本の国家のために輸出をやっているんだ。あなた方も環境問題とか健康とか言わないで、我慢しろと言われました。

何のために輸出してかせぐかと言えば、われわれ全体がより健康でより豊かな生活をするためにやっているはずですから、その肝心なものを犠牲にして、輸出しました。もうけましたと言っても、みんなの健康がだめになってしまったり、青い顔をしているのでは意味がないわけなのです。もちろん、無茶苦茶なことは言いませんが、しかし、健康や環境を考えるのは当たり前です。それが企業には無理や無茶に聞こえるのでしょうか。これもずいぶん交渉しました。

私どものやっていた方式がその後全国に波及した、横浜形式という方式で、その後環境庁ができたり、国もあとから法律をつくったのです。自治体の方がやりだしたのです。今では、その程度は当然だということになっています。もしあの当時やらないで、全部かせぐだけになってしまったら、日本領土の環境は無茶苦茶になるところでした。かせぐといってもご承知のとおりかせげませんね、なんでも売り飛ばして、外資も全部かせぐなどということは、今は非難を受けております。だから、できっこないのです。自分たちもそこそこ生活もよくする中で、経済的に外国に売るものも売らなければいけないでしょう。そういうものが、あるバランスで考えられていないと、とにかく国のためだからほかのことはどうでもよろしいんだなという走り方を、これからはしてられない。

中央で統御すれば戦争の時のようにどうしてもそういう一方的な走り方になります。地域開発と言っても、地域のためではなくてお国のためだ、輸出と言ったら、とにかくそれ行け、ほかのことは犠牲になってもいいんだというやり方をやってきました。ついでに他人の環境まで犠牲にしてしまうというので、このごろ熱帯雨林の問題などいろいろ出ております。日本の企業がみんな森をバサバサ切ってしまうと、地球環境をおかしくしていると責められる時代になりました。

やっとそういうことに気が付いてきましたけれども、これをもう一遍立て直すため、日本の今のやり方全体をもう一遍再構築しないと、これからの本当の国際化時代についていけないのではないかと思います。

そのためには、いきなりお国のために、国家目的でこれではなどと言うのではなくて、地域からきちんと考え直してみる。その地域とは閉鎖的な地域ではありません。当然地域の問題一つがいま世界に、地球全体につながっているのです。われわれが食べているものもそうです。地球上からのものを集めて食べております。ものをつくるのでもそうです。割り箸一本をつくるのでも、それが熱帯雨林の問題につながっているのです。そういうことをいつも考えなければいけません。フロンガスが地球のオゾン層に穴を開けてしまうなどということを皆さん方もお聞きでしょう。我々の生活はそんな閉鎖的ではなくて、全部地球全体につながっています。

しかし、地球のことを考えながら、自分たちの身近な地域をまずどうするんだ、それぞれの地域をどうやってよくしていくんだということを考え、いい町、いい地域をつくっていく。それが結局いい日本、いい世界、いい地球をつくっていくだろうと私は思います。

今、「まちづくり」という言葉以前に使われてきた言葉の話をいたしました。「地域開発」とか「都市開発」とか「都市計画」、「地域開発」という言葉は用語自体は立派なのですが、その運用は、ただ国や役所だけがやっているという実態でした。地域の問題は地域の問題、都市の問題は都市に住んでいる人間が自分たちの問題として考えなければいけない。そのためには、市民にとって実感できるやさしい言葉がいるのではないかとということで、私は「まちづくり」しかも全部ひらがなの言葉を提唱しているのです。まちづくりという言葉はもちろん今までもなかったわけではありません。しかし意味は、今のように積極的に使っておりませんでした。

まちづくりと市民

私は、これからの地域の問題を考えるには自分たちそれぞれの町をどうやってつくるのか、皆さんがた市民の問題として考えてほしい。いきなり国家目的になったり役所だけがやるのではない、市民自身の問題、それは岡山だったら岡山県というのも地域ですけれども、岡山市、あるいは岡山市全体は考えられないのだけれども、自分たちの住んでいる周りのことだったらわかるというものもあります。町は大きい部分、小さい部分いろいろあるんですが、最低限、自分の家の外に広がっているのです。

自分の家のほかに隣もあり、前に道路もあり、小川も流れていたり、そういうもの全体が自分たちの町としてまずお考えいただきたく、それがもう少し広い地域になり、やがて岡山市全体になり、もう少し広く言えば岡山県になり中国地方になり国土につながるのです。やはり市民が自分たちの問題を身のまわりから考えてほしい。町というのは国家目的だけで役所だけのそのときのご都合でやられると、あまりいいものにならない。本当にいいものにするには、自分たちが自

分たちの問題として考えるべきだ。そのためにこの「まちづくり」という言葉を使いました。市民的な言葉です。ひらがなでまちづくりというと、役所というよりも、これは自分たちに関係があるのではないかという感じを皆さん方もお持ちになるのではないかと思います。

まちづくりは自分たちがやらないとできないんです。役所は道路や下水をつくったりするかもしれない。川の改修をするかもしれない。でもそれで町ができていくわけではありません。そういうのは人間でいえば骸骨です。骨組みはなければ困ります。しかしまさか骸骨がここへ出てきてお喋りをしても、とても聞くに耐えません。また、それで生きていられるものでもありません。生きてはいないのです。

生きてる中身をつくっているのは、市民のみなさんなのです。しかし、それをちゃんとしっかりさせるための骨組みをつくっているのが役所の役割です。だから、別に役所がだめだと言っていいわけではありません。両方いるんですけれども、実際に都市や地域の生きていく中身は市民のみなさんなのです。そういう活動全体が岡山なら岡山の町を感じるのです。それを支える裏方が公の仕事だろうと私は思っております。

そうすると、まちづくりというのはまず市民の問題なのです。

そうなってくると、この「まちづくり」という言葉を使うと、そんなに全国、画一的な街になるはずがないのです。住んでいる人たちが考えると、それぞれ地域が違うのですから、北海道の雪の降るところ、北陸の雪の降るところと岡山と、私も大雪のときに日本列島もずっと歩きましたが、この辺は雪が少ないですね。兵庫県と広島県が降っていても、岡山のあたりは降っていませんでした。それはよくも悪くも、そういうところなのですから、北陸の人とこちらと一緒にならない。

まちづくりと地域性

家のつくりも違います。北陸の富山は、家は一番広いのです。それは猛烈に雪が降ったら、自前で、一人で全部防がなければいけない。散家村というまるで一軒が森をつくってしまい、森の中に住んでいるんです。あそこは夏は意外にフェーン現象で暑い。その日陰もつくり、鎮守の森みたいなどころに一軒住んでいるのです。家だけはすごく大きいのです。それは雪のなかの、そういう富山県という条件のなかで生まれた家です。

それぞれが違うのです。何も同じにする必要はない。かつては沖縄が日本に復帰しました。そのとき、公営住宅のこれまでの画一的な基準を持って行って、沖縄でそのとおりにつくってしまったのです。ところが沖縄では全然使いものにならない。何が使えないか。公営住宅はまず雨戸がありません。どうしても雨戸がいるというのです。まず向こうはものすごい台風が来ます。岡山とは全く違いますから、どうしても台風のためにはいる。だけど台風のためだけではないんです。日差しが全く違います。日が入ってきて、たたみが焼けてしょうがないから、昼になって閉めておくのです。だから、もっと考えれば、軒をもっと大きくしなければいけないんです。沖縄の伝統的な家の建て方は大きな屋根をつくって、土 と言って土間にしておき、照り返しを防ぐのです。そして、中のほうに住む、大きな屋根だけが土の上に出ていて、土間があり、照り返しも土間だから吸収して、なかで天井を大きくして、涼しくして、という風にみんな風土的にできています。

家一軒でもダテにつくっているわけではなくて、いろいろな人が苦勞しながら、この方がいいんじゃないかとだんだん改良して、地域性が出ているわけです。それをいきなり全国画一の公営住宅、羊かんを切ったみたいなものを持ってしまったわけです。見た目も面白くない。アメリカ軍が入ってしまったので、最近は少なくなってしまいましたけれども、昔の沖縄の家は見た目もきれいでした。ちゃんと石の垣根があって、それと屋根の関係は、台風の強いときに上をずっと行かせてしまうような、昔の人はすごくみんな考えているのです。

町というのはやはり風土によって違うのです。あるいは風土が似ていても、歴史が違うところがあります。例えば京都と横浜とそんなに気候は違わないかもしれないが、横浜のようについ最近できた町と、京都みたいに伝統的なお寺があるところと、同じ家をつくられては風景のぶち壊しです。気候が似ていても、また違っていいんです。地域はそれぞれ歴史と風土が違うのです。だからこそそこに住んでいる人たちがいるわけです。

恵まれているから全てがいいかどうかはわかりませんが、岡山の人たちは風土的に恵まれている。しかし、本当に恵まれていると思った自分たちの風土を認識しているのかということが問題です。その風土を認識して上で、自分たちはこういう町、こういう風土なのだからこういうのをつくろう、こういう歴史をもっているのだから、その歴史を生かしてこうつくろうとそれを生かさなければならぬ。ただ何となく生きているというのだったら、だれでも住んでいられるのです。

意識的なまちづくり

風土はそう変わらないかもしれませんが、やはり時代は動いていくのです。町はそのなかでほっておくと、いいものをいいと認識していないと、いつのまにか画一的な波で普通のつまらないものになってしまうかもしれない。ここはいいところだ、ここは自分達のものだ、ここは岡山らしいというところを、自分たちで認識しないと、人がやってくれるんだろうという、今の沖縄みたいに極端ではないかもしれませんが、沖縄や北海道は極端だから画一的ではだめだとわかってしまうのですが、他のところはそんなに極端ではありませんから、何となく意識せずに流されてしまうんです。その結果、よかろうなどと言っているうちに、何だかちっとも、いつのまにか岡山が岡山らしくなくなってしまうことになるのかもしれない。

そういう点をかなり意識してやったのは隣の倉敷で、自分たちの歴史をかなり意識して、全体がそうとは言えませんがごく一部では倉敷らしさをつくっています。ですから、市民が強い意識をもたないと、世の流れだからいいんだというのでは、今いいだけの話になります。町は今の話だけでないのです。明日の話、明後日の話、子どもたちの時代、その次の時代につながるのです。そこにどういうふうな自分たちの町をつくっていくか。

ドイツの小さな町を回ったときに、一生懸命街をきれいにしているのです。戦争などちょっとゴチャゴチャになってしまった小さな町ですが、自分たちも多少家を改良したりしています。それは昔の伝統がありました。伝統的に大きな木組みがあって、美しい町があったけれども、一時は塗った方がカッコがよく見えたので全部塗ってしまった。でもそれを赤外線で見ると昔こんな大きないい木組みがあったと分る。そこでそれをかき落としまして木組を出し、もう一遍ちゃんと色を塗り直し、壁も塗り直して、窓枠もきれいにすると見違えるようなきれいな家が出てきた

んです。じゃ、この家もやろう、あちらの家もやろう。そうすると、その町全体が素晴らしい町になってきます。そうすると役場もちょっと広場をつくろうとか、カッコいい街灯をつくろうかなとなってきた、そういう小さな素晴らしい町がたくさんできているのです。

そういう町がコンクールをしています。そのコンクールもずいぶん厳密なのです。私もいろいろなコンクールとかいろいろな審査員をやりましますが、日本のコンクールは言うては悪いのだけれども、割とその時の時流に流され、簡単に終わらせてしまう。ドイツ人は非常に熱心で、審査員が八人くらいいても、全員が候補地を一日に二つずつくらい、二週間かけて回る。日本だったら、審査員を頼むような人はだいたい忙しいから、今日は岡山、明日は名古屋などということになってしまって、とても二週間拘束できないですけども、ドイツは拘束してしまって、審査をさせます。

また、自分たちの町に誇りを持っているのです。ところが、そのなかの基準がなかなか面白い。全部はご紹介しませんけれども、もちろん美しいとか緑があるとかなんか言うんですが、市民がどれだけそこに参加しているかも基準なのです。役人だけがやっているとかではだめで、役所がやりましたでは評価が低い。市民がどこまでやっているかが大きな価値基準なのです。

もう一つは、私の若い日本人の友人がオブザーバーみたいにその審査員で、このごろサロンカーなどというのがあって、うしろが会議室になっていて、バスの中で行きながら議論するらしいのですが、ドイツ人は本当にかんかんがくがくやります。彼がそこに参加して、ある町が美しいと思ったそうです。ところがあれはだめだ、何がだめだとワーワーやる。あの町は自分たちの材料をちゃんと使っていない、あるいはあの町はどこかの人の真似をしているからだめ。一見したところはきれいなのです。だからこっちの町のほうがいいと日本人は思ったわけです。確かにその町のほうが普通で見ればただ美しいというだけで美しいのかもしれませんが、でも本当に自分たちでやっていない、物真似をしてやっているのはだめという評価なのです。

個性的なまちづくり

そのくらい厳しい議論をしながらということは、それだけ町は自分たちでつくるものだ、本当に自分たちでつくったものでないと、一時的にはきれいかもしれませんがやはり愛着が湧きません、さっき申しあげたとおり、自分で苦労した町は愛着があります。見える結果はその時代時代違います。今みたいにお金がありません。今だったら、私だってもうちょっとこうしたとか、こういう材料が使えたというのがあります。でもとにかくあのとき一生懸命にやった、ああいうことで苦労があった、ものすごい抵抗があった、あんなことはばかだとか言われましたけれども、そういうことが全部、今から考えると思い出ですから、そういう町は愛着があります。

それはお金があれば、またどこかきれいにすればいいんです。材料がちょうどどうだというのは機会があれば。でも町の人たちみんながそういう気持を持っているのかどうか、そして一緒にやろうと思っているのかどうか、世の中の流れでやっているのではない、自分たちの町を自立的に作っていくという決心をしているのかどうかの問題です。ただそのときだけ、時代の流行でちょっときれいにしてしまった、だけど自分たちがやったのではないから、人の借り物に住んでいるというんだと、一時はきれいに見えますけれどもそれっきりです。

だから、今のドイツの評価はなかなかいいところをいっていると思います。一見してきれいだ

からいいというのではないのです。美人コンクールでどっちがいいと言っているのではないのです。やはり自発的に自分たちでやっているか。そうでないと永続性はありません。美人コンクールだったら、一時の美しい方でいいのかもしれませんが。でも町は一時とはいかないのです。町は何年でも、何百年でも、何千年でも続くのです。

町は若い町も年取ります。年取りますけれども、またフェニックスのように若返ります。また成熟し、また年取っていくというのが町なのです。そういうふうにはずっと続いていくものなのです。今日、明日の話をしているのではいい町は絶対できません。今までの過去の人たちがやってきたことを評価して、生かしながら、未来にどうやってつなげていこうかということだと私は思っています。自分一代の、自分一人の問題を言っているのではないんです。町は市民と一緒に協力しあいながら、共同作品としてつくるのです。一人では絶対できないんです。一人の偉い王様とか偉い市長さんがつくるのではありません。協働してつukらない限りできません。それも、自分たちの一代の今だけではない、それを未来にどうつなげていくか。未来につなげていくためには自分たちの過去がどうだったかということを知らないとできません。

未来はなかなか読めません。明日のことだってわからない。五年先のこともわかりません。でもわれわれは過去のことだったら、勉強するとかなりわかります。そうすると、十年前はこうだったから、あとの十年は高価な、百年前のことを考えると、五十年ぐらい先のことを考えられるかもしれません。

私は歴史をよく勉強します。横浜市に入る前はいろいろな地域のまちづくりのお手伝いをしていたのですが、必ず歴史を聞きます。ところが意外に知らない人がいて、市役所の人など「へへへ」などと言って、今の都市計画法がどうだとかは知っているんですが、自分たちの町がどうだったか知らない。ここは城下町かどうか知りません、お城はありますけれど、お城があるなら城下町でしょう。いや、城下町ですかね、などという調子の人もあります。

それでも私は無理やり聞き出しますと、そうだった。じゃ、どういう殿様がいたんですか。またそれは知りません。岡山みたいな立派なところはもちろん皆様方もよくご存じでしょうけれども、そういうのはたくさんあります。

都市の質的評価

問題なのはあまり数値的な比較だけをしては困るということです。それはそこそこ貧しいときは、道路舗装率が何だとか下水道普及率はどうか言っておりました。でも、これからはそうではなくて、自分たちの「まち」らしい質の問題。質は評価できません。能力でもそうでしょう。今は全部偏差値の時代だから、点数がついてしまって、こっちは人は東大だとかという振り分けをするなど、全然面白くなくなっていると思っているんですが、しかしそんな偏差値的な点数でなくて、たとえば運動の能力があるとか、細工をするとうまいとか、料理をするとうまいとか、釣をするとうまいとか、これと英語ができるか数学ができるかは全然比較できないんです。

人間の能力だって比較できない個性をたくさん持っているんです。絵がうまいということ、数学ができるということに比較、どっちがいいという比較ができない。ただ絵がいくらうまくてもいい大学には入れません、芸術大学は別として。絵もそれはやはりすごい能力だし、すごい個性なのです。

比較できない質があるはずなのです。それが都市の個性です。ただそれを評価し、ちゃんと自分たちで認めない限りだめです。

そういうものを広く、私どもは文化と言います。文化といっても、芸術文化だけではありません。もちろんここではずいぶん立派な美術館がたくさんできました。オリエント美術館から県の今度の美術館、あるいは私も拝見させていただいたこの近くにある小さな竹久夢二の美術館、あるいは林原さんの美術館などすばらしいものがたくさんあります。そういうものの蓄積もあるし、芸術文化という意味でもいいと思いますが、しかし私のいっている文化は芸術文化もそうですが、もっと広く自分たちが自分たちの価値をちゃんと作り出すということです。自分たちの生活の仕方を作り出す。それはそれで一つの独自性を持っているという文化を作っていたきたい。

つまり文化はものだけ考えているのではない。いつも心で考えている。そういう評価をする。ものの量が多いことがいいことだとか、一人当たりの量とか何とか率とか。そういう量もどこかでは考えなければいけませんけれども、それだけでは計れないものを持っているかどうかです。それが本当に自分たちにいいものであり、自分たちのものと感じられるのなら、独自の地域文化になっているのだと思います。

むずかしく理屈は考えなくてもいいんです。要するに、量ではなく質の問題です。ところが質というのが以前は理解できなかった。私も十五年ぐらい前、まだ横浜市役所にいた時代ですが、ハーペーパーさんの本を翻訳したことがあります。その題名が『The Quality of Urban Environment』そのまま直訳すると『都市環境の質』ということなのです。

ただ、私もそのころ、質という問題をどういうふうに考えていかよくわかりわかりませんでした。まさにそのころは、大きいことはいいことだという高度経済成長の時代で、都市環境の質と言っても全然わからない。これをどうやって翻訳しようかと思ひまして、その本の題名を私は『人間環境都市』としました。つまり、質とはいつでも人間がいるということです。人間から考えるということです。量が大きいというのは人間がいなくてもいいんです。人間なんか抜きにして勘定できるのです。

ところが質という問題は、人間に対してなのです。人間が住む町なのです。だから人間から考えた町、人間に対して意味のある町、人間とはもちろん生理的な人間でありますし、生物的な人間でもあり、同時に感性を持っています。美しいものは美しいとか、楽しいものは楽しいとか、嬉しいものは嬉しいとか思うものは評価できないんですけれども、そういう気持ちも入っている。

イギリスではまちづくりの原則としてアメニティーという言葉を使います。今は環境庁などでさんざんアメニティーというようになりました。でもイギリス人の解説を読むと、アメニティーというのはわれわれはよくわかっている、つまりまさに生活の質なのです。そこへ住んでいてよかったな、楽しいな、落ち着いてるな、やすらぎがあるな、嬉しいなという感情全体がアメニティーなのです。でもイギリス人は、われわれはこれはよくわかっているのだけれども、説明はできないんだ、はっきり定義すると少しくそになってしまうので、よくわかっているけれども、全体のトータルなものなのです。そういうものですから、量にはなりません。

でもそういうものに価値を認める。ただ人間がどのぐらいいるとか、交通がどうだとか、利便性だとか、もちろんそういうものは必要なのかもしれませんが、そうじゃない、何でも計測できないような、しかし人間にとってはすごく大切なものがあるのです。生物としての人間に

とってこそうだし、心、感情を持っている人間にとってよかつたなと思えるようなところをアメニティーとして評価し、まちづくりの基本にしています。

魅力的なまちづくり

「まちづくり」ということを聞いて皆さん方がこれは人ごとではない、自分たちの問題だと思つていただくことが一番です。画一的にどこかの人がやるのではなくて、本来は市民が自分たちらしい町をどうつくるかなのです。

そのためには、さっき申し上げたとおり、井のなかの蛙ではだめなのです。今は情報時代、国際化時代で、どんどんいろいろな情報が山ほど入ってきます。そのなかで、都市は競争関係になっていきます。今はどこでも住みたければ住めるんです。私の友人でも、奥さんがちょっと体がおかしくなつて、スペインに住んでいました。シルバーコロombiaという計画を通産省が言いましたが、通産省が言わなくてもその前に住んでしまったんです。ご主人は定年になつて、私も行きましたが、地中海がぱーっと真っ青に見え、向こうにジブラルタルが見えて、そういうところで悠々と住んでいます。

病気だから行くと言うので、どうしてですかと言つたら、日本では病気が悪くなるというのです。湿気があるところで、しかもあまり町に出られない。車椅子で歩けるところがない。ここは歩けるし、空気も乾燥しているし、値段も安いし、そこへ行って住んでしまいました。そして、奥さんも車椅子だったのに、杖をついて歩けるようになってしまいました。

ご主人がスペイン語ができてるかというと全然できません。私が行つたときも、ある料理屋へ連れていつてくれましたが、メニューが注文できないのです。そこから知っている人に電話をかけて、これを注文したいんだと。向こうの人が今度レストランのほうに、これこれだとスペイン語で通訳したりして、そういう住み方でもちゃんと住んでしまつているんです。そして病気は治つてしまつたと言つています。これは一例ですけれども、そんな具合に、何も政府が言わなくても、今はどこでも住めるよう世界中になつているのです。

これから本当に自分たちの地域をよくしないと、人口はどんどん外へ行つてしまう。本当にいい人間が住まないといふ町はできません。これからはソフト化された産業になります。産業をつくるのでもそうなのです。結局、ソフト化された産業は人間の頭がつくり出すわけです。しかし、頭だけが歩いてくるわけではありません。頭が住むためにはいい人間が住む。そしていい人間がものを考えたり、新しいものを作り出せる町であるためには、人間的な町、楽しい町、「住んでいてよかつたな」と思ふ町、面白い町、魅力的な町。そういう「まち」を作るのは皆さん方の力です。

法政 THE HOSEI Vol.16 No.8

1989年10月号(通算No.399)

目次

〈講演〉

市民とまちづくり—魅力ある地域をめざして— 田村明...2

〈夏季海外研修セミナーに参加して〉

最後の夏休みを NMSU で 秋永みのり...12	
セミナーを終えて 人見剛史...14	
“イメージ”のアメリカと実際のアメリカ 石井恵美子...16	
“アメリカ” 榎戸利恵...18	
〈追悼〉	
矢内原伊作先生を悼んで...20	
〈OB 寄稿〉	
三八法友会 志摩旅行	
——運動部の仲間たちと—— 大谷哲丸...24	
〈合宿ルポ〉	
ラグーマンの暑い夏...26	
〈OB 訪問〉	
“ミニ・シアターが運ぶ文化の風”/本田 拓夫氏 瀬戸環...28	
〈蔵書紹介〉	
「内藤文庫」について 西村閑也...30	
〈LIBRI〉	
川成 洋著『スペイン読書ノート』 吉岡栄...34	
1988 年出版著作目録 (3) ...36	
CAMPUS INFORMATION...38	
フィリピン大学からの手紙...47	
世界の大学/サラマンカ大学 川成洋...48	
表紙画/齊藤隆「歌坂と砂土原の交わる地に立つ通信教育部」(市ヶ谷)	
目次カット/植田	